

# オーストリア皇妃エリザベートの婚礼 —新聞が報じたロイヤル・ウェディング—

大井 知範

## 要旨

19世紀のオーストリア・ハプスブルク帝国にエリザベートという皇妃がいた。彼女の名前を聞いて、ミュージカルを想起する人は多いかもしれない。ミュージカル「エリザベート」は、この実在のオーストリア皇妃を題材に、彼女の苦悩と自立の物語を描いた人気の演劇作品である。実在の人物と実話がもとになっているため、この舞台を観劇した者は、当時のハプスブルク王朝の内実を知り歴史への想像力を深めることができる。

とはいえ、ミュージカルで描かれるのは、そのほとんどが宮廷内部の閉ざされた世界の話である。王宮の外の世界とのつながり、つまり皇妃エリザベートと民衆の絡みや相互認識はミュージカルのなかではあまり明瞭に描かれていない。皇妃に向けられた国民の視線がいかなるものであったのか、皇妃と国民の関係性がどのようなものであったのかは十分に伝わってこないのである。

そこで本稿では、ミュージカルでは描かれなかった国民の視線に注目し、とりわけ、皇室に入る際のエリザベートに向けられた民衆の期待と認識を明らかにする。新しい皇妃として迎えられた16歳のエリザベートは、当時のオーストリア国民からどのように受け止められていたのか。そこで作られた花嫁のイメージは、実際の彼女とどれくらい一致していたのか。ここでは当時のオーストリアとドイツ語圏で発行された新聞を活用し、その報道から国民の皇妃観を探る。さらにその過程で、エリザベートが祖国バイエルンを出発し、ウィーンへ輿入れをする道中の歓迎ぶりを再現し、それに対するエリザベートの反応と様子を浮かび上がらせる。

婚礼を報じた当時の紙面から気づくのは、エリザベートの優美さや振る舞いが至るところで絶賛されていた点である。しかし、彼女の外見やしぐさに関心が集まる反面、その内側に新聞が踏み込むことはなく、16歳の少女が抱えていた幼さ、重圧、強い感受性、精神的もろさなどを国民は知る由もなかった。これが後の皇妃と国民の関係に複雑な影響を与えることになる。また、皇帝とエリザベートの結婚には、オーストリアとバイエルンの結束強化、つまり政略結婚という意味づけがあったことも分かる。そして、同時期に勃発したクリミア戦争がこの時期の新聞紙面を覆っていく様子は、エリザベートと帝国の運命に暗雲が立ち込める事態を暗示しているといえよう。

## The Wedding of the Austrian Empress Elisabeth: The Royal Wedding in the Newspapers

Tomonori Oi

### Abstract

There was an empress called Elisabeth in Habsburg Empire of Austria in the 19th century. Many people may think of a musical when they hear her name. The musical “Elisabeth” is a popular theatrical work that tells the story of her agony and experience of becoming independent based on the life of the real Austrian empress.

Since this musical is based on real people and true stories, those who watched it enjoy learning about the inner working of the Habsburg Empire at that time and expand their imagination about history.

However, the musical is mainly about the closed world inside the imperial court. It does not provide a clear depiction of the palace's connection with the outside world, that is, the interaction and mutual recognition between the Empress Elisabeth and the people. It does not fully convey the people's perception of her or what kind of relationship there was between her and the citizens of the country.

Therefore, this paper focuses on the people's perspective, which is not depicted in the musical, and clarifies their expectations and perceptions of Elisabeth at the time when she joined the imperial household as a member of the imperial family. How did the people of Austria perceive the sixteen-year-old Elisabeth when she was welcomed as a new empress? How accurate was her image presented as a bride compared to the real Elisabeth? This paper explores the people's view of the empress from the reports in the newspapers published in Austria and the German-speaking countries at that time. Moreover, it recreates the enthusiastic welcome she received as she traveled to Vienna from her homeland of Bavarian to get married and brings to light how she behaved and reacted to the reception.

What is noticeable from the newspapers that reported the wedding is that her elegant appearance and manners were praised everywhere. However, while her looks and behaviors attracted their interest, the people of Austria had no way of knowing the sixteen-year-old girl's immaturity, strong sensibility, mental fragility, and the heavy pressure she was under. That was going to have a complicated influence on the relationship between the empress and the people of Austria. We can also see that the marriage between the emperor and Elisabeth meant a stronger unity between Austrian and Bavarian. In other words, it was a political marriage of convenience. The way the newspapers became full of reports on the Crimean War that broke out at the same period seems to predict that dark clouds were going to gather over the fate of Elisabeth and the empire.

## はじめに

19 世紀のオーストリア・ハプスブルク帝国にエリザベートという皇妃がいた。彼女の名前を聞いて、ミュージカルのヒロインを想起する人は多いかもしれない。ミュージカル「エリザベート」は、この実在の美しいオーストリア皇妃を題材に、彼女の苦悩と自立の物語を描いた人気の演劇作品である。そこでは、エリザベート、彼女の夫である皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世、夫婦に割って入る黄泉の帝王トート（トートとは「死」を意味するドイツ語。つまり黄泉の世界を統べる死神、男性として擬人化された「死」の化身）を軸に、この三者が織りなす愛の錯綜と対立、および「生と死」の相克が主題となっている。脚本・作詞ミヒャエル・クンツェ、音楽シルヴェスター・リーヴァイのコンビが手がけたミュージカル「エリザベート」は、1992 年のウィーン初演以来、世界各国の劇場で公演が催され、

日本でも1996年から宝塚歌劇団、2000年からは東宝が上演を重ねている<sup>(1)</sup>。

この作品は、フィクションの要素を散りばめつつも、エリザベートの生涯をめぐる全体の流れはおおむね史実に沿って展開する。特に、登場する人物の相関関係や出来事は、その多くが実話をもとにしたものである。脚本のクンツェも語るように、この作品のシナリオの土台には、ブリギッテ・ハーマンらが書いた実証的な伝記の記述が据えられていた<sup>(2)</sup>。そのため、ミュージカルには当時の王朝の内実がリアルに再現されており、歴史への興味と想像力をかき立てる作品となっている。

とはいえ、舞台上で描かれるのは、そのほとんどが宮廷内部の閉ざされた世界の話である。エリザベートの目線を中心に、夫である皇帝、姑ゾフィー、息子ルードルフといった皇族の目線や心情、および相互の関係は、確かに精巧かつ重層的に表現されている。しかしながら、エリザベートと王宮の外の世界とのつながり、つまり民衆との関係や相互認識はあまり明瞭ではない。劇中の一部では、ハンガリー人の反抗と歓呼、贅沢な美容法への庶民の反発など、「下からの視線」は登場するが、それでもやはり、ごく限られたわずかなシーンだけである。皇妃エリザベートと国民の関係性は一体どのようなものであったのだろうか。

そこで本稿では、ミュージカルでは十分に描かれなかった国民の目線に注目し、とりわけ、皇室に入る際のエリザベートに向けられた民衆の目を捉え直してみたい。新しい皇妃として迎えられた16歳のバイエルン公女は、オーストリア国民からどのように見られていたのか。当時の新聞報道からその手がかりを探してみたい。

なお、ミュージカルのなかでも、エリザベートの興入れは重要な意味を持つ一場面である。そこでは、天真爛漫なバイエルン公女エリザベートが、オーストリア皇帝に一目惚れされ、弱冠16歳で宮廷入りするシーンが登場する。しかし、このロマンティックなシンデレラ・ストーリーこそ、それ以降エリザベートの身に次々と起こる不幸の出発点となり、人間の姿をした「死」(トート)の求愛が彼女の運命を翻弄することになる。本稿では、物語序盤の婚約から挙式に至るこの過程を、ミュージカルでは登場しない「国民」の目線に立って検証することで、エリザベートの苦悩と災いの原点へ踏み込むことになる。

この主題にアプローチするため、本稿では、同時代のオーストリアとドイツの新聞各紙を史料として利用する。具体的には、ウィーンで発行された Wiener Zeitung (『ウィーン新聞』: WZ)、Die Presse (『プレッセ』)、Morgen-Post (『モルゲン・ポスト』: MP)、Österreichische Illustrierte Zeitung (『オーストリア絵入り新聞』: ÖIZ)、さらにはザルツブルクの Salzburger Landeszeitung (『ザルツブルク地方新聞』: SL)、リンツの Österreichisches Bürger-Blatt (『オーストリア市民新聞』: ÖBB)、ペシュト(ハンガリー)の Pesth-Ofner Localblatt (『ペシュト・オーフェン地方新聞』: POL) を使用する。また、エリザベートの母国バイエルンからも、ミュンヘンで発行された Neue Münchener Zeitung (『新ミュンヘン新聞』: NMZ)、パッサウの Neue Passauer Zeitung (『新パッサウ新聞』: NPZ)、アウクスブ

ルクの Allgemeine Zeitung (『一般新聞』:AZ)、さらには、ドイツ語圏の主要な新聞であったライプツィヒ (ザクセン) の 2 紙、Leipziger Zeitung (『ライプツィヒ新聞』:LZ) と Leipziger Illustrierte Zeitung (『ライプツィヒ絵入り新聞』:LIZ) も加えておきたい<sup>(3)</sup>。

## 1. 婚約の発表

1853 年 8 月 13 日夕方、皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世は、シェーンブルンを出発し避暑地のバート・イシュルへ向かった<sup>(4)</sup>。自然豊かな同地滞在の目的は、保養と狩猟のほか、自身の誕生日を親族と過ごすことにあった。その席には、隣国バイエルンの叔母や従妹たちも呼ばれており、いとこ関係の皇帝とエリザベートはそこで運命的な出会いを果たす。

1853 年 8 月 24 日、『ウィーン新聞』の一面に皇帝の婚約を知らせる速報が掲載された。

フランツ・ヨーゼフ 1 世皇帝陛下は、イシュルでの滞在中、バイエルンのマクシミリアン・ヨーゼフ公爵とバイエルン王家出身のルドヴィカ公妃の息女であらせられるエリザベート・アマリエ・オイゲニー公女と婚約され、それに先立ちバイエルン国王マクシミリアン 2 世陛下ならびに公女殿下のご両親の同意を得られた。皇室と帝国にとって大変幸福で喜ばしいこの出来事に無限の祝福が注がれんことを<sup>(5)</sup>。

他紙でもこのお祝いのニュースが一斉に報道され、各地で見られた歓迎の様子も併せて伝えられている。オーストリアの新聞だけでなく、エリザベートの母国バイエルンの新聞もこの婚約を報じ、「イシュルからの予期しない報せは、抑えきれない喜びと熱烈な祝福の声とともに各層から歓迎された<sup>(6)</sup>」という。同時期、新聞ではベルギー王太子とオーストリア公女マリー・ヘンリエッテ (Marie Henriette Anne von Österreich) の結婚式 (8 月 22 日)、および皇帝誕生日の祝賀 (8 月 18 日) の様子が詳細に報じられていたが、さらにもう一つ明るいニュースが紙面を飾ることになったのである。

しかし当然のことながら、この婚約は一組の男女の結婚というよりは、国と国の間の成婚という見方が紙面には強く出ていた。つまり、フランツ・ヨーゼフ 1 世という一人の「男性」とエリザベートという一人の「女性」の結婚ではなく、ハプスブルク＝ロートリンゲン家 (オーストリア) とヴィッテルスバッハ家 (バイエルン) の結婚として捉えられたのである。実際、婚約発表後の現地バート・イシュルには、オーストリア皇帝一家とバイエルン公爵マクシミリアン一家のほか、バイエルン国王マクシミリアン 1 世の娘でプロイセン王妃のエリザベート (Elisabeth Ludovika von Bayern: フランツ・ヨーゼフ 1 世とエリザベートの伯母、かつ後者の名は彼女の名前に由来) がおり、さらには避暑地に滞在中のバイエルン国王夫妻が急ぎ駆けつけ、この婚約を祝福する様子が新聞で報じられている。この結婚の本質が王族間の結びつきの強化であることを暗示する顔ぶれである。要するに、両名

の結婚はバイエルンとオーストリアの王朝間、さらに巨視的に見れば、ドイツとオーストリアの紐帯を強化する契機として歓迎されていたことになる。580年来続いてきたオーストリアとバイエルンの王侯間結婚は、今回が24組目になるという<sup>(7)</sup>。

しかし、一連の婚約報道を見ていて気になるのは、肝心の花嫁の人物像に関する情報が紙面に登場しない点である。そこでは、エリザベートの誕生年月日や両親が紹介されるのみで、彼女がどのような人物かは触れられない<sup>(8)</sup>。もちろん、皇帝の婚約相手として予想外の人物が出現したことで、持ち合わせている情報がなかったという事情も考えられる。しかし、そもそも妃候補の人格についての情報は必要なく、その出身と家柄こそが最重要の関心事となる「王族結婚の常識」を反映しているのかもしれない。

また、後世にロマンティックな逸話として語り継がれる二人の馴れ初めについてもほとんど言及されることはなく、婚約に至る経緯が簡単に紹介される程度である。たとえば、イシュルの舞踏会で二人は短い会話を交わし、そこでエリザベートに魅かれた皇帝が即決かつ頑固に意志を貫き通したと新聞は伝えている<sup>(9)</sup>。当時パート・イシュルの「一目惚れ」の真相がどれくらい公になっていたかは定かでないが、いずれにせよ、国民の目から見ると、そこへ至るプロセスよりも新皇妃誕生のニュースそのものが何よりも重要であったのかもしれない。



図1 バイエルン公女エリザベート  
(ÖIZ, 10. 10, 1853)



図2 バイエルン公女エリザベート  
(LIZ, 12. 11. 1853)

婚約の儀礼を終えた後、エリザベートは家族とともにミュンヘンへ戻ることになるが、皇帝はわざわざザルツブルクまで同行し見送っている。1853年8月31日、ザルツブルク市民は幸せいっぱい二人を温かく迎えている。とりわけ、公の前に姿を現した皇帝の婚約者エリザベートを地元紙は次のように評している。「我々は皇帝の傍らに卓越した優美



さを備える女性を見た。つまり、玉座と王冠を皇帝と分かち合うことになる王家の気高き新芽となる皇帝の花嫁である」。また、未来の皇妃の「気品に満ちて若くほっそりとした姿」が称えられ、彼女の存在は、「オーストリアにとっての新たな明るい希望の星」「素晴らしい未来の新たな保証である」と大きな期待が向けられた<sup>(10)</sup>。このザルツブルク滞在中、エリザベートが母のルドヴィカとともに大聖堂のミサへ向かう際、「エリザベート公妃を目にする幸運にありつけた者は、若くはつらつとした皇帝の花嫁の優美さと愛くるしさに真に魅了された」のであった<sup>(11)</sup>。

ちなみに、家と家の大事な縁談の場で、花嫁の父マクシミリアン公爵の影は薄い。パート・イシュルで両家が「見合い」の場を設けている最中、彼はコンサートに参加するためドイツ南部のバーデンバーデンに滞在中であった。そこにエリザベートとオーストリア皇帝の婚約を知らせる緊急の電報が届き、8月22日早朝、彼は急ぎイシュルへ向け出立する慌てぶりであった<sup>(12)</sup>。マクシミリアン公爵が貴族らしからぬ享楽主義者で自由を尊ぶ性格を持ち、それゆえミュンヘンの市民から人気があったことはよく知られている。ミュージカルでも、この「自由人」ぶりがいかんなく表現されているが、エリザベートの性格が父親譲りであったことは、後の宮廷生活において彼女に不幸をもたらす一因となってしまう<sup>(13)</sup>。

1853年夏のパート・イシュルで進展した皇帝とエリザベートの婚約は、ミュージカル「エリザベート」の劇中、「番狂わせ婚」という形で滑稽かつ感動的に描かれている。姉のお見合いに付き添った妹が、23歳の美男子の皇帝から一目惚れされ、即プロポーズというまさにシンデレラ・ストーリーゆえ、演劇や映画でこの「番狂わせ」がクローズアップされるのも無理はない<sup>(14)</sup>。求婚された15歳の少女エリザベートも、凛々しい年上のフランツ・ヨーゼフ1世に恋をしていた。しかし、そうした恋愛ストーリーの内幕を知らない新聞各紙は、この縁組を王朝間の手堅い結婚、そして新しい皇妃誕生の吉事として歓迎した。エリザベートという妃候補は、国民にとって想定外の人物名であったが、格式ある古い家柄のヴィッテルスバッハ家出身の女性であることに世論も不満はなかった。新聞がこのニュースを淡々と冷静に報道していたことは、本人や親族、現代の我々の目線とは異なり、当時の国民にとっては「番狂わせ」ではない「常識どおりの」成婚であったのかもしれない。

## 2. ロイヤル・ウェディングはどう報じられたか

### (1) バイエルンからオーストリアへ

1854年4月20日、ウィーンへの興入りを控えたエリザベートは、故郷のミュンヘンに別れを告げようとしていた。バイエルンとオーストリアは隣国であるため、結婚後も里

帰りはさほど困難なことではなかった。しかし、そうはいつてもまだ16歳の少女である。公爵家の家中の人々と別れの挨拶を交わす際、エリザベートは大粒の涙を流していたという。一方、公爵邸の前に押し寄せた多数の市民からも、花嫁の門出を祝福する声が発せられた<sup>(15)</sup>。

突然感極まった皇帝の花嫁は、馬車のなかで立ち上がり、顔を涙で濡らして愛するミュンヘン市民にハンカチを振り別れの挨拶をした。この感動的な瞬間に、ほとんどの者は涙を流さずにはいられず、全員がこれ以上ないほど心を打たれていた<sup>(16)</sup>。

同日、エリザベートは挙式に出席する親族とともにミュンヘン北方に位置するレーゲンスブルクへ向かう。ちなみに、ウィーンでの挙式に出席する家族は、両親以外には長兄ルートヴィヒと姉ヘレーネのみであり、弟や妹たちはこの旅に同行していない。このとき姉ヘレーネがどういう心境で挙式に参列したのか、興味深いはその詳細は分からない。

ウィーンへ向かう花嫁一行の交通手段は、馬車ではなくドナウ川の汽船であった。バイエルン領のレーゲンスブルクが乗船地となり、そこから船は東方のウィーンをめざしドナウ川を下った。レーゲンスブルクの街では、市民の盛大な歓迎のもと、花で彩られた汽船「シュタット・レーゲンスブルク」号にエリザベートたちは乗船した<sup>(17)</sup>。4月20日の夜7時、最初の宿营地であるバイエルン領シュトラウペンクに船で到着した一行は、楽隊演奏で出迎えられ市民から熱烈に歓迎される。欧州屈指の名家へ興入れする我々のプリンセスを祝福しようと、街は旗や花で飾りつけられ、明るく照らし出された市内のお祭りムードは夜の11時まで続いた。公共旅館に投宿した公爵一家は、翌21日の午前9時に再び汽船に乗り込み、出発の際も軍楽隊と合唱団の音楽のもと多数の市民の歓声を受ける。その惜別の声に対し、エリザベートは船の手すりへ歩み寄り白いハンカチを振って応え、市民も帽子やハンカチを振り、涙を流しながら花嫁を見送った<sup>(18)</sup>。

4月21日午後2時すぎ、オーストリア入国前の最後のバイエルン領であるパッサウに船はさしかかった。軍楽隊がオーストリア国歌を演奏するなか、この地でもやはり、エリザベートの旅立ちを見届ける市民の盛大な熱狂ぶりが見られた。パッサウでは、一行を出迎えるためオーバー・オーストリア地方の代表団26名が待機していた。この代表団が乗る汽船にエスコートされ、エリザベートを乗せた船はいよいよオーストリアへ入国することになる<sup>(19)</sup>。

同日の午後6時、汽船「シュタット・レーゲンスブルク」号はオーストリア領のリンツに到着し、上陸地点では大観衆が「皇帝の花嫁」を出迎えた<sup>(20)</sup>。この地ではエリザベートに嬉しいサプライズが用意されていた。新郎フランツ・ヨーゼフ1世がひそかにリンツをお忍びで訪れ、入国したばかりの花嫁を出迎えたのである。花嫁の到着を待ちわびていたのは皇帝だけではない。リンツの街全体がお祭りムードに沸き立ち、市内の各所はきら

びやかなイルミネーションで照らし出され、花嫁一行が泊まる宿泊施設も旗と花で盛大に飾られていた<sup>(21)</sup>。「皇帝の花嫁」が最初に降り立ったオーストリアの街は、一晩中歓喜に包まれていたようである。

翌22日午前8時、ドナウ汽船会社が用意した特別仕様の蒸気船「フランツ・ヨーゼフ」号に乗り換えたエリザベートは、ウィーン近郊のヌスドルフへ向け船旅を続けた。リンツを出発する際、民衆は歓声を上げながら船を見送り、夫人たちが熱狂的にハンカチを振る姿にエリザベートも応え、自身のハンカチを振った<sup>(22)</sup>。「心を引きつける愛想のよさと気さくさを醸し出し、感動を呼ぶこの行動により、集まった民衆の興奮した歓声はいつそう高まった」と、その美しい情景が新聞紙上で報じられた<sup>(23)</sup>。ちなみに、皇帝は朝4時半に別の船でウィーンへ向けすでに出立しており、同日の夕方に予定されているヌスドルフでの出迎え行事に備えた。

ところで、エリザベート一行がリンツから乗り込んだ汽船「フランツ・ヨーゼフ」号は、高速で快適性のきわめて高い船であったという<sup>(24)</sup>。この船でドナウ川を航行中、川沿いの村々は華やかに飾り立てられ、多くの住民が祝福の歓声を上げていた。河岸の各所では、バイエルンとオーストリア両国の旗、紋章、花、リボンなどで彩られた家屋、さらには凱旋門、ピラミッド、記念柱などの祝賀用の構造物が見られた。ただし、船上のエリザベートの様子については、歓声に應えるシーンがわずかに紹介されるだけで、その内面や心境に関する機微ほどの新聞でも触れられていない。

## (2) 花嫁の入京

ミュンヘンを立って2日後の4月22日、エリザベートはいよいよオーストリアの帝都ウィーンに足を踏み入れようとしていた。花嫁が降り立つ船着き場は、ウィーン市北部のヌスドルフと定められていた。この日の午前、皇帝はリンツから汽船「オーストリア」号を使い一足早くヌスドルフに到着している。午後3時すぎ、皇帝、皇族、ウィーン大司教、軍や行政府の高官が付近に姿を見せ、詰めかけた多くの民衆も花嫁を乗せた汽船の到着を待ちわびていた。

午後4時すぎ、船の接近を知らせる信号を受け、皇帝と皇族はヌスドルフの船着き場へ向かう。礼砲と国歌が響き渡るなか、新婦エリザベートを乗せた船が岸に近づきつつあった。ヌスドルフに集まった民衆の様子については、新聞で以下のような描写がなされている。

皇帝の花嫁の登場に向けられた熱狂と歓声は、短い言葉では言い尽くせないくらいのものである。何千もの万歳の声が空気中を覆い、夫人たちはハンカチ、男性たちは帽子を振り、ますます活発になりながら絶え間なく万歳の声が繰り返された<sup>(25)</sup>。



こうした民衆の歓声に応え、船上では「ピンクのドレスを着た壮麗な姿のエリザベート皇妃が愛想よく白いハンカチを振り挨拶をしていた<sup>(26)</sup>」という。別の新聞でも、「人で密集した浜に向かい気品に満ちた様子でおじぎをし、手に持つ白いハンカチを絶えず振りながら挨拶をする<sup>(27)</sup>」エリザベートの様子が伝えられている。また、「愛らしくはつらつとした顔にスリムでほっそりとした体つきは、まさに朝露がしたたる一本のバラのように見えた<sup>(28)</sup>」と、彼女の容貌は絶賛された。

各紙ではこれに続く感動的なシーンも綴られている。『オーストリア絵入り新聞』によれば、「ピンクのシルクのドレスに白いカシミアのマントーラをまとい、白のベールをあしらったピンク色のシルクの帽子をかぶる」エリザベートが姿を現すと、「皇帝は急ぎ足で甲板へ向かい花嫁を熱烈に抱きしめた」という<sup>(29)</sup>。他紙の掲載記事でも、「船が到着し錨を下ろすやいなや、皇帝は甲板にかかる階段を花嫁めがけて飛び上り、彼を迎える花嫁の手を取ると、民衆の歓声上がるなかで皇帝は彼女の口にキスをした<sup>(30)</sup>」「キスと握手。筆舌に尽くしがたい瞬間であった<sup>(31)</sup>」と、23歳の皇帝の情熱的な行動を一様に報じている。

これに続く光景は、幸運にもそこに居合わせたすべての人々にとって記憶から決して消え去ることのないものとなるであろう。というのも、船着き場の橋が下がりきらないうちに、皇帝は彼特有のみなぎる生命力で「フランツ・ヨーゼフ」号に飛び乗り、甲板へと至る階段を駆け上り、あふれんばかりの若々しい魅力と優美さで光り輝く花嫁の額にキスをしたのである。オーストリアの強き統治者であり多数の王冠を継承する者が、エチケットを破りもっぱら情愛の赴くままに振舞うこの感動的な瞬間は、その場にいる全員に言葉では言い表せない印象をもたらした。幸せそうな新郎を見ると、彼が君主であることを完全に忘れてしまうほどであった<sup>(32)</sup>。

結局、この新郎新婦の対面シーンは抱擁だけで終わったのか、それとも額にキスをしただけか、あるいは口にもキスをしたのか、各紙の記事内容に差異があるため正確なことは分からない。ただ、皇帝のはしゃぎぶりから推察すると、その全部であった可能性もあながち排除できない。『プレッセ』では、この感動の対面と類似した約1世紀前のほほえましいエピソードを紹介している。18世紀半ば、フランクフルトには皇帝就任のパレードに臨むフランツ1世の姿があった。このとき、バルコニーから夫の姿を見つけた妻マリア・テレジアは、パレードが終わるのを待ちきれず通りへ急いで駆け下り、大衆の面前で夫に抱擁したと伝えられている<sup>(33)</sup>。「女帝」マリア・テレジアと夫フランツ1世(フランツ・シュテファン)の仲睦まじさは、ハプスブルクの王朝史でもよく知られた挿話である。しかし残念ながら、フランツ・ヨーゼフ1世とエリザベートの夫婦関係は、それとは別の形で王朝史のなかに刻まれることになる。



図 3 ヌスドルフ下船  
(LIZ, 6. 5. 1854)

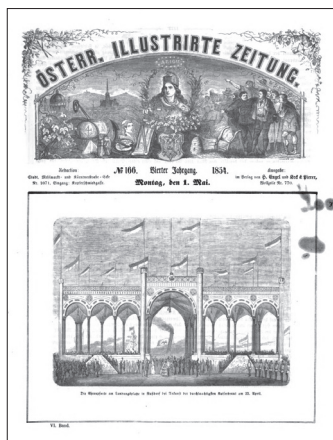


図 4 ヌスドルフの歓迎式  
(ÖIZ, 1. 5. 1854)

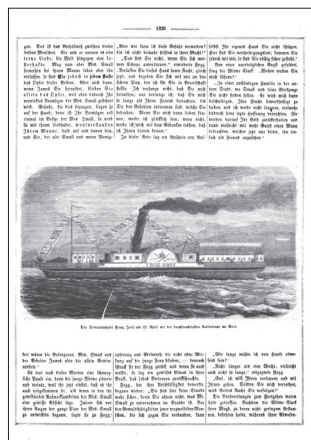


図 5 汽船「フランツ・ヨーゼフ号」  
(ÖIZ, 1. 5. 1854)

なお、エリザベットのウィーン到着の場面にはもう一つ感動の続きがあった。「その直後に皇帝陛下の母君が甲板に渡り、息子が選んだ人生の伴侶を感極まって抱きしめたとき、周囲 4 分の 1 マイルにいる皆が感涙にむせんでいた<sup>(34)</sup>」という。つまり、皇帝の母ゾフィーが新婦エリザベットを出迎える感動のシーンがそこで展開されていたのである。「皇帝の母君が優美さを放つ姫君を抱きしめる大変感動的で非常に美しい瞬間<sup>(35)</sup>」は、その後の嫁姑関係を知る後世の者にとっては複雑な思いにさせられるエピソードである。

さて、ヌスドルフでの両家の対面と挨拶を終え、一行は馬車でシェーンブルン宮殿をめざした。先頭の馬車には、皇帝と新婦の父マクシミリアンが同乗し、2 台目に新婦エリザベットと新郎の母ゾフィー、3 台目に皇帝の父フランツ・カールと新婦の母ルドヴィカ、以下両家の親族の馬車が続いた。沿道には多くの市民と歓迎の装飾があふれ、辺りに響く祝福の歓声に対し、エリザベットは「明らかに深く感動した様子で応えていた<sup>(36)</sup>」という。この馬車行列は、シェーンブルンでも大観衆に迎えられ、宮殿に到着後、長旅の疲れを癒すために身内だけの夕食会が催された<sup>(37)</sup>。

ところが、実際のエリザベットの様子は新聞が伝えるものとは少し異なる。3 日間の長旅を終え、彼女は疲労困憊で顔も青ざめていた。それでも、新皇妃たる彼女はシェーンブルンのバルコニーへ上がり、大勢の民衆を前に微笑みながら会釈し歓声に応えなければならなかった。さらに宮殿内では、姑が任命した「生気がなくぶっきらぼうな顔の」皇妃侍女官長エスターハージー (Sophie Esterházy-Liechtenstein) 伯爵夫人らの出迎えを受け、心が休まらない対面の時間を過ごすことになる<sup>(38)</sup>。華やかな歓迎行事の裏で、新皇妃の訓練はすでに始まっていたのである。

### (3) 入城パレード

上述のように、エリザベートの輿入れを当時の新聞報道から再現してみると、航行したドナウ川周辺、および到着地ウィーンの市民から彼女が熱烈な歓迎と祝福を受けていた様子が伝わってくる<sup>(39)</sup>。その熱狂ぶりに対し、花嫁は優美さを放ちながら朗らかに手を振って応えていた。また、実際にエリザベートを自分の目で見ていない国民にもそれが伝えられ、「美しく優美で愛くるしい皇妃に魅了され感嘆させられるという評判が広く聞かれる<sup>(40)</sup>」ようになる。こうした背景のもと、新聞各紙は敬愛と期待を込め、頻繁に「国母(Landesmutter)」という言葉のエリザベートに付している。つまり、国民が期待する理想的な「皇帝の妻」「帝国の母」としての皇妃イメージが世論には最初からあり、それに合致するエリザベート像が作り上げられようとしていたのではないか。しかしながら、エリザベートは未だ無垢で未熟な心を持った16歳の少女のままなのである。

4月23日、挙式を翌日に控えたエリザベートは、シェーンブルン宮殿を出て市内中心部のホーフブルク王宮へ馬車で向かった。馬車によるこの移動は、新皇妃がウィーンの市壁をくぐり王宮入りする重要な儀式も兼ねていた。しかしパレードの雲行きは怪しいものとなる。この日、午前中は太陽が明るく出ていたものの、正午ごろから上空は雲に覆われ、歓迎用の装飾が飛ぶくらいの強風がウィーンに吹き荒れていたという<sup>(41)</sup>。この天気急変は、何か不吉な事態を予感させるようでもある。結婚後のエリザベートに吹きつける「逆風」の予兆か。はたまた、ミュージカル「エリザベート」に沿って解釈するならば、荒天は黄泉の帝王トートのウィーン入京を告げる神の演出ということだろうか。

午後2時、エリザベートは母ルドヴィカとともに6頭立ての馬車に乗り込み、シェーンブルン宮殿を出発した。午後2時半、馬車はパレードの起点となるテレジアヌムに入る。その後、白馬の8頭立て馬車に乗り換えた一行は、入城儀式の舞台となるケルトナー門をめざした。このときのエリザベートの出で立ち、絹製のピンクの服の上にレースのドレス、宝石を散りばめたベルトときれいな腕輪、頭にはダイアDEM、および白と赤のバラを添えた花冠という華麗な装いであった。馬車がケルトナー門手前のエリザベート橋に差しかけた際、教会の鐘の音と祝砲が市内に響き渡り、花嫁の到着が全市に告げられた<sup>(42)</sup>。ちなみにこの儀礼の舞台は、希少な花の鉢植え6,000個によって彩られている<sup>(43)</sup>。エリザベート橋では、廷臣やウィーン市長が新皇妃を出迎え、高位の聖職者や貴族を乗せた20台以上の馬車がエリザベートの馬車を王宮までエスコートした。午後5時、皇帝と皇族、新婦の家族の出迎えを受け馬車はホーフブルクの王宮に入り、エリザベートは翌日の結婚式に備えることになる<sup>(44)</sup>。





図6 入城パレード  
(LIZ 6. 5. 1854)

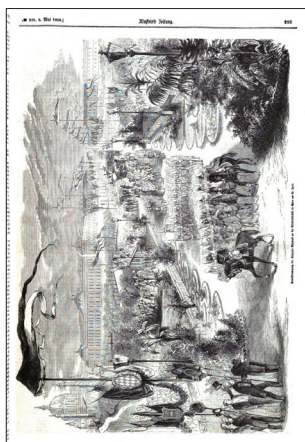


図7 入城パレード  
(LIZ 6. 5. 1854)



図8 入城パレード  
(ÖIL 8. 5. 1854)

では、このパレード中のエリザベートはどのような様子であったのだろうか、新聞報道からその姿を探ってみよう。旗や花が盛大に飾られた沿道からは、多くの市民が祝福の声を上げ、彼女はそれに頭を下げて応えている。万歳声を浴びたエリザベートは、すべての方角の民衆に対し愛想よく感謝の姿勢を示したという<sup>(45)</sup>。新聞記事によれば、「熱狂的な歓声と限りない祝福の声は、全行程で新婦の公妃殿下に向け響き渡り、心からの歓迎ぶりを見て明らかにお喜びの様子になり深く感動され、愛情、忠誠、敬慕の表明に対し、親しみと慈悲にあふれる様子でお応えになった<sup>(46)</sup>」という。こうしてウィーン市民と皇妃の相思相愛ぶりが報じられるが、エリザベートが実際には何を想っていたか、やはりその心境を紙面から読み取ることはできない。



図9 入城パレード  
(ÖIZ 22. 5. 1854)



図10 皇帝と皇妃  
(ÖIZ 24. 4. 1854)

#### (4) アウグスティーナの婚儀

1854年4月24日、ロイヤル・ウェディング当日、ウィーン各地の教会や学校では午前中から祝福のミサが挙行され、劇場の記念公演や慈善団体の施しが祝祭ムードに華を添えた。午前10時、シュテファン大聖堂ではラウシャー大司教（Joseph Othmar Ritter von Rauscher）による荘厳なミサが催され、帝国政府やウィーン市の要人とともに多数の市民がそれに参列した。祝賀のミサは、市内の他の教会でも実施され、王宮内では新郎新婦と両家の親族が参加する内輪のミサが執り行われた。祝賀行事はウィーンだけでなく帝国各地でも見られ、前日の夜から当日にかけ、祝砲、チャリティー行事、記念公演、祝宴などが各都市の祝祭ムードを盛り上げた<sup>(47)</sup>。

皇帝と新皇妃の結婚式は、4月24日の夕刻、ホーフブルク王宮に近接するアウグスティーナ教会で催された。この教会は、14世紀前半のフリードリヒ美公の時代に建造され、17世紀に皇帝フェルディナント2世が跣足修道会に引き渡し宮廷の教会となる。アウグスティーナ教会は、伝統的に皇室の結婚式を挙げる場であり、皇帝ヨーゼフ2世の時代からは独立した教区を持つようにもなる<sup>(48)</sup>。フランスへ嫁ぐマリー・アントワネットも、兄のレーオポルト2世を代理新郎に見立て、出国前にこの教会で結婚式を挙げている。

1854年4月24日のウィーンは悪天候であった<sup>(49)</sup>。それでも、正午ごろから民衆が教会の周辺に集まり始め、午後3時にはかなりの人だかりとなり道路の通行規制が敷かれた。午後5時半、式の列席者、つまり両家の家族、皇族、列国外交団、国内各地からの代表団、ウィーン市長、駐奥聖座大使、政府要人、軍人、女官の一同が教会に参集した。式場内には、およそ100個のシャンデリアと約1万本のろうそくが光を灯し<sup>(50)</sup>、「無数の燭台とシャンデリアが放つ昼間のような明るさで壮麗な印象をもたらした<sup>(51)</sup>」という。教会の内部には飾り付けが施され、前方の身廊には赤い幕、床には赤絨毯が敷かれており、中央の本祭壇にたくさんの花が飾られた。そこでは、ウィーン大司教ラウシャーを筆頭に70人以上の聖職者が主役の登場を待ち構えていた。

午後6時半、イントラードが流れるなか、姑ゾフィーと母ルドヴィカに寄り添われながら新婦エリザベートが教会に入場する。その衣装は、銀のモアレのドレス、ギンバイカの花飾り、きらめくダイヤモンドの王冠、ギンバイカで固定されたベールといった構成であった。ドレスの長裾は、王宮から教会までは小姓が持ち、教会内では女官がその役目を引き継いだ。『プレッセ』は新婦入場の様子を以下のように伝えている。

新婦が教会に入場した瞬間、居並ぶ者たちの間に息を呑むような緊張が走った。新婦は、長裾のドレス、そしてきらびやかな金銀で編まれギンバイカの装飾を施されたモアレ・アンティーク調のマントを身にまとっていた。その頭上には、姑のゾフィー大公妃が自身の結婚式の日被った王冠が光り輝いていた。新婦の肩の上にはベールがなびき、胸は鮮やかなバラの花束で美しく飾られていた<sup>(52)</sup>。



入場する花嫁に寄り添うゾフィーとルドヴィカは、両者とも金を織り込んだ真紅の引裾がついた白の衣装とダイヤモンドの冠を身にまとっていた。トランペットとティンパニーが鳴り響くなか、新郎新婦はラウシャー大司教に迎えられて中央祭壇の近くへ進み、祈祷台でひざまずいて短く祈りをささげた。

そこから婚礼の儀式はつづがなく進行する。指輪交換の際、最初の礼砲が屋外で発せられ、「今まさにオーストリアが皇妃を得たことを帝都の市中に伝えた<sup>(53)</sup>」。大司教からの問いかけと新郎新婦の誓いの言葉を経て、深い祈りと宮廷合唱隊による賛歌の唱和の折、2 回目の礼砲が野外に響いた。午後 7 時半、新郎新婦は列席者の万歳の歓声に送られ、二人寄り添いながら教会を後にする<sup>(54)</sup>。その際、最後の 3 回目の礼砲が市内にとどろき式の終わりを市民に告げた。

式を終え王宮へ戻った後、新郎の皇帝は他国の外交団から挨拶を受ける。エリザベートは、外交団の夫人たちを歓待し、「言葉に表せられないくらいの優美さと愛らしさ」で引見する様子が伝えられている。つまり、皇妃としての初仕事をこなす様子が新聞では伝えられていた。また、このとき新皇妃は、外交官夫妻や外国の要人だけでなく、自国の将官や将校団とも接見し、女官や身の回りの世話をする侍女、延臣たちの紹介も受けた。ホーフブルクのホールにおけるこのレセプションが終了すると、姑ゾフィー主催の親族による夕食会が開かれ、晴れの日の行事がすべて終了した<sup>(55)</sup>。

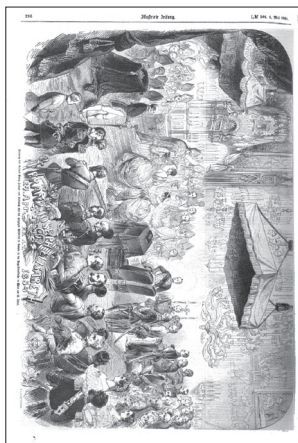


図 11 皇帝結婚式  
(LIZ 6. 5. 1854)



図 12 皇帝結婚式  
(LIZ 6. 5. 1854)



図 13 皇帝結婚式  
(ÖIZ 15. 5. 1854)



図14 皇帝  
(LIZ 22. 4. 1854)



図15 皇妃  
(LIZ 22. 4. 1854)



図16 ラウシャー大司教  
(ÖIZ 29. 8. 1853)

### 3. 報道されなかった真実のエリザベート

#### (1) 挙式直後の報道

挙式翌日の4月25日夜、ウィーンの内市は壮大な装飾とまばゆい灯りで照らし出された。照明用の多彩なバルーン約1万5千個を自治体が用意したほか、通りには80個のシャンデリアが輝いていた<sup>(56)</sup>。結婚を祝うこの特別なイルミネーションのなか、夜8時半から1時間半、皇帝夫妻は市の中心部を馬車でパレードし、沿道の大勢の市民から祝福を受けた。このとき、皇帝の弟とエリザベートの姉ヘレーネも馬車に乗りパレードに参加している<sup>(57)</sup>。市内の華やかなお祭りムードは、1814-15年のウィーン会議以来の盛大さであったと新聞では報じられている<sup>(58)</sup>。しかし皮肉なことに、40年前のウィーン会議がもたらした安定的な国際秩序、いわゆる「ウィーン体制」は、まさに同じ時期、はるか東方で勃発した大国同士の戦争（クリミア戦争）によって崩れようとしていた。

ミュージカル「エリザベート」では、挙式のシーンの後、場面が舞踏会へと切り替わる。日本版では、その会場にトートダンサー（宝塚版は黒天使）たちが現れ、挙式を終えたばかりの新郎新婦を引き裂き、死のダンスを乱舞する。トートがエリザベートを「最後のダンス」へ誘惑する第1幕の見どころシーンである。この宮廷舞踏会が実際に催されたのは、挙式から3日後の4月27日のことであった。同日午後7時ごろ、華麗な衣装と装飾品を身につけた皇族、将軍、大臣、各国の外交団、および夫人たちが舞踏会の会場に集った。午後8時すぎ、主役である皇帝夫妻が登場し、祝賀舞踏会はクライマックスを迎える<sup>(59)</sup>。皇帝は大元帥の軍服を身にまとっていたのに対し、エリザベートは、宝石を多数あしらったピンクの絹の衣装にレースのドレス姿で現れ、頭には光り輝く冠、腕には高価な宝石を

添えた装飾品がつけられていた<sup>(60)</sup>。

舞踏会開始の先導役は、皇妃エリザベートとケンブリッジ公爵（イギリス王室からの来賓）、皇帝とヘレーネ公妃の両ペアが務めている<sup>(61)</sup>。『アウクスブルク一般新聞』が伝えたこの組み合わせを信じるなら、「幻の夫婦」ともいえる皇帝フランツ・ヨーゼフ1世とヘレーネがダンスのペアを組んでいることになる。しかし、別紙ではダンスの相手が少し違う。皇妃の相手がケンブリッジ公爵である点は一致しているものの、皇帝のパートナーは義母ルドヴィカとなっており、どちらの報道が正しいかは判然としない<sup>(62)</sup>。『オーストリア市民新聞』によれば、ほかにも大公妃ゾフィーとマクシミリアン公爵のペアがダンスを踊ったとあるが、これが事実なら、ミュージカル「エリザベート」でこの二人が並んで歌う「結婚の失敗」、つまり新郎新婦の組み合わせが「似合わない (Sie/Er passt nicht)」ことを連呼するあのコミカルなシーンを彷彿とさせる。実際のマクシミリアンとゾフィーが、このときどのような会話をしていたのか興味深い。ちなみに、この舞踏会では、ヨハン・シュトラウス2世指揮の楽団がダンスの楽曲を演奏し、新皇妃に捧げるワルツも披露されている。

## (2) 報道とは異なる現実

こうして花嫁のお披露目行事はスムーズに進行していたようであるが、そこに登場するエリザベートは人々の目にどのように映っていたのであろうか。

華やかなセレモニーは、みな的心を揺さぶり大変素晴らしい意味づけをもたらした。若き皇妃の華麗な優雅さ、自然に出る親切心、朗らかで温かな機敏さ、好意的な寵愛は、祝典に限りなく素晴らしい魅力を与え、決して消え去ることのない不滅の関心を引き起こした<sup>(63)</sup>。

後にヨーロッパ中から絶賛されるエリザベートの美貌は、写真を見る限り、16歳のこの時点ではまだ顕著ではない。しかし、彼女から漂う気品と優美なスタイルは、すでに人々を魅了し始めていたようである。「彼女の容姿と体形の若々しい優美さは、未来のオーストリア皇妃をめぐるここ数カ月来リトグラフやスケッチ、彫塑から得られていたイメージをはるかに超越するものであるという声を広く耳にする<sup>(64)</sup>」と、ある記事は伝えている。また、「感じのいい愛想のよさと愛らしい外見に表れる慈悲深い魅力<sup>(65)</sup>」も、彼女を直接目にした人々をとりこにしていた。

このように考えると、花嫁の初々しい見た目の好印象が、彼女に対する国民の期待を過度に高めてしまったのも事実である。『ウィーン新聞』の記事では、優美さと気品、若々しい美しさに満ちあふれた伝統ある家柄の娘が、「この帝国に幸福と繁栄をもたらす高位の女性の列に加えられた<sup>(66)</sup>」ことにより、「オーストリアは今再び国母を手にしたのであ

り、あらゆる身分や出自の者に対しその崇高な模範を示すことになる<sup>(67)</sup>と、仰々しい期待が彼女に向けられている。つまり、16歳の新皇妃は、この年齢で早くも「国母」としての存在理由を付与されていたのである。皇太子妃の時代を経ず、心の準備も整わない少女のまま、いきなり「皇妃」「国母」として期待される精神的重荷は想像を絶するものであったのではないだろうか。その結果、エリザベートが備えていた「感じのいい愛想のよさ」は、宮廷と国民の双方からの重圧に耐えきれず、結婚後次第に彼女から失われていく。やがて、民衆の前では表情を変えない、そもそも人前に姿を現さない「愛想のわるい」皇妃という逆のイメージにそれは置き換えられていくのである。

では、新聞が映し出さなかった花嫁エリザベートの真実の姿はどのようなものであったのだろうか。記事を追う限りでは、前述のように新皇妃は行事を一つ一つ無難にこなしていたように思える。しかし現実には、すでに挙式前日のパレード時に不安と緊張から彼女は涙を浮かべていた<sup>(68)</sup>。アウグスティーナ教会での挙式の際は、華麗な衣装に身を包まれながらも花嫁の顔はひきつり、真つ青な表情であったと伝えられている。大司教の問いに返答する場面では、室内に響き渡る新郎の威勢のいい返事とは対照的に、新婦の「はい(Ja)」は、ほとんど聴き取れないくらいの小声であったという。おまけに、婚姻の成立を祝福する野外の礼砲の音に彼女は驚き、思わず体をすくめるあり様であった<sup>(69)</sup>。式終了後の謁見行事の際も、祝賀に訪れた人々を前にしてエリザベートは泣きじゃくり、ホールから逃げ出してしまった。こうした緊張と極度の不安に起因する号泣、せきと発作は、さらに数日間続き、4月28日の大事なレセプションを欠席せざるを得ないほど、エリザベートの心身は疲労困憊な状態に陥っていた<sup>(70)</sup>。

このように、エリザベートは各所で民衆から喝采を浴びていた一方で、彼女自身はそれに何らの喜びを感じておらず、むしろ煩わしさを感じていたようである<sup>(71)</sup>。あるいは、傍らの皇帝の面目を潰さないように、そうした嫌悪感を押し隠し取り繕っていた。確かに、国民や宮廷は万全の受け入れ態勢で花嫁を迎え、装飾やセレモニーも心のこもった盛大なものであった。それは本稿でも扱った当時の新聞報道からも十分に伝わってくる。しかしながら、肝心のエリザベートの方には準備ができていなかった。国民の熱烈な歓迎を各地で浴びれば浴びるほど、また、婚礼のセレモニーが豪華であればあるほど、夢から現実の世界へ引き戻されたエリザベートにかかる重圧は測り知れないものとなったであろう。ちなみに、同じく若くしてフランス王室に嫁いだマリー・アントワネットには、王妃になるまで4年間、ヴェルサイユで「王太子妃」としての準備期間が与えられていた。しかしそれでも、国民からの期待と重圧を背負った若き日のマリー・アントワネットの苦しみはよく知られている<sup>(72)</sup>。

以上のように、新聞で報じられた皇帝とエリザベートの結婚は、ロマンティックなシンデレラ婚などではなく、歴史ある二つの王家の政略結婚であり、そしてオーストリアにとつ



ては新しい「国母」の誕生を祝うセレモニーであった。政略結婚といっても、マリー・アントワネットのようにかつての敵国に嫁ぐわけではなく、友好国への興入れであるため緊迫感はさほど大きいわけではない。ただ、世継ぎを産まなければこの結婚が政治的に意味をなさないというプレッシャーは変わらない。そもそも、皇帝と姉ヘレーネの当初の縁談が、両母親（ゾフィーとルドヴィカ姉妹）の政治的な思惑によるものであった以上、花嫁が妹のエリザベートに入れ替わっても結婚の意味が変わるわけではない<sup>(73)</sup>。

こうして、「政略結婚」としての期待、「国母」として国民の期待がエリザベートに向けられ、さらには、伝統と慣習を重んじる宮廷からの精神的な重圧がこれに加わる。ハプスブルクの宮廷史を知る者であれば、結婚後のエリザベートに対する姑ゾフィーの仕打ちが単なる「嫁いびり」でないことは理解できるであろう。ハプスブルク家には、この家が求める「皇妃」像があり、エリザベートは自らをそこに押し込める諦念と柔軟性を持ち合わせていなかった。それもそのはず、彼女はバイエルンの田舎で伸び伸びと育った16歳の純真無垢な少女なのである。当時の新聞は、そうした彼女の真実の姿から目を背けてしまっていた。そして、「美しき皇妃エリザベート」という自分たちが求める理想の「国母」像を彼らは勝手に創り出し、やがて勝手に失望することになるのである。

## おわりに

本稿では、エリザベートの興入れをめぐる当時の新聞報道を追いながら、婚約と挙式の様子を国民の目線に立って再現した。最初に気づくことは、エリザベートの優美さや外見、振る舞いが至るところで絶賛されていたことである。しかし、見た目やしぐさに関心が集まる反面、彼女の「内側」に新聞が踏み込むことはなく、16歳の少女が抱えていた幼さ、重圧、強い感受性、精神的もろさなどを国民は知る由もなかった。そのため、宮廷に入った彼女の辛苦を国民は理解できないまま、皇妃と国民の関係には微妙な距離感が生まれ、やがて相互の失望へとつながっていく。皇妃としてのエリザベートの「務め」は、公式行事への参加や民衆との触れあいではなく、何よりも美の追求と美貌の維持に向かう。こうして、ミュージカル第1幕の終盤に登場する「ミルク」のシーンでは、皇妃と国民の疎遠な関係、そして国民の皇妃に対する怒りがクローズアップされることになる。つまり、オーストリア国民はエリザベートを新たな「国母」として期待したが、彼女はその期待に応えることができなかったのである。

ただし、オーストリアにとっての「国民」とはそれほど単純な概念ではない。つまり、当時のオーストリア帝国は多民族国家であり、ここで見たドイツ系の世論がすべてではなかった。帝国内には、他にもマジャール（ハンガリー）人、スラヴ系のボヘミア（チェコ）人やクロアチア人、イタリア人など多数の民族集団が混在していた。では、帝国内の非ドイツ系の諸民族は、皇妃として迎えたエリザベートをどう見ていたのだろうか。ミュージ



カル「エリザベート」は、ハンガリーの独立闘争に光を当て、ハプスブルクが抱える複雑な民族問題を劇中に描き出している。やがてエリザベートは、結婚時に祝福を受けたウィーンのドイツ系市民ではなく、帝国に対して反抗的なハンガリーの人々に強い親近感を抱くようになる。夫にとっては悩みの種である民族問題が、皮肉なことに妻エリザベートには、逃避と救済の道を用意することになるのであった。

一方、皇帝とエリザベートの結婚には、オーストリアとバイエルンの結束強化という意味づけもあった。つまり、恋愛結婚のように見えて、その内実は政略結婚の側面も含まれていたのである。しかし、1871年にエリザベートの母国バイエルンはドイツ帝国の一部に編入され、対外的な独立性を失うことになる。ならば、バイエルンとオーストリア両王家の結婚は、ドイツ帝国とオーストリアの橋渡しの役割に意味を転じることになるのか。いや、エリザベートと一人息子のルードルフ皇太子は、ドイツ帝国の建国を主導したプロイセンとビスマルクを嫌悪していた。皇帝フランツ・ヨーゼフ1世は、以後30年以上にわたって外交政策の軸をドイツとの同盟に置くわけだが、これがやがて息子との政治的確執につながり宮廷史に残る悲劇を生むことになる。さらには、このドイツとの同盟こそが、第一次世界大戦における帝国の最終的な破滅を呼び込むことになるのであった。

では、そもそもなぜオーストリアはドイツ一国へ依存せざるを得なかったのか。元をたどると、それはクリミア戦争における皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の判断の誤り、つまり友好国ロシアを裏切り国際的な孤立に陥る失態に起因していた。そしてこの致命的な決断が下された時期こそ、パート・イシュルの婚約発表とロイヤル・ウェディングに国じゅうが浮かれていた、まさにあの時期なのである。その意味でも、エリザベートの悲劇の物語と帝国の滅亡史はこの時点からすでに結合していた。挙式後の舞踏会の折、エリザベートと「最後のダンス」を踊っていたのは、もしかしたらハプスブルク帝国そのものであったのかもしれない。

#### (Endnotes)

- (1) ドイツ語では、正しくは「エリーザベト」と発音するが、日本のミュージカルのタイトルは「エリザベート」とアクセントが後ろに置かれる。この表記の影響により、実在の皇妃の呼称も日本では「エリザベート」で定着しているため、本稿ではこれに表記を統一する。
- (2) Brigitte Hamann, *Elisabeth. Kaiserin wider Willen* (Wien, 1981) [ブリギッテ・ハーマン著、中村康之訳『エリザベート 美しき皇妃の伝説』上下、朝日文庫、2005年]。これ以外にも、エリザベートに関しては数多くの出版物があり、なかでも、同時代人の証言や各種の私文書を活用したコルティの実証的な伝記は、研究史上の原典といってもいい。Egon Caesar Conte Corti, *Elisabeth, «die seltsame Frau»*. *Nach dem schriftlichen Nachlaß der Kaiserin, den Tagebüchern ihrer Tochter und sonstigen unveröffentlichten Tagebüchern und Dokumenten*, 38. Aufl. (Graz / Wien / Köln, c1934).
- (3) この時代のドイツ語圏のジャーナリズムに関しては、拙著『世界とつながるハプスブルク帝国 海軍・科学・植民地主義の運動』彩流社、2016年、42 - 52頁を参照。
- (4) WZ, 16. 8. 1853, S. 1929.
- (5) WZ, 24. 8. 1853, S. 1995.

- (6) AZ, 27. 8. 1853, S. 3812.
- (7) 婚約時ではなく挙式時のものではあるが、以下の記事文面がこの王族間結婚の性質と期待を物語っている。「ハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家、何百年にもわたりドイツ国民の運命の大部分を左右する主導者であり、その名前と行動で歴史の最も輝かしいページを彩った両家であるが、そのドイツ最古の二つの王族間に偉大な未来を約束する素晴らしい紐帯が結ばれ、今日という日はるか未来まで我々に幸福な実りをもたらすことを我々は確信することになるであろう」。LIZ, 22. 4. 1854, S. 258.
- (8) SL, 25. 8. 1853, S. 770.
- (9) NMZ, 31. 8. 1853, S. 1690.
- (10) SL, 1. 9. 1853, S. 793.
- (11) SL, 2. 9. 1853, S. 797.
- (12) AZ, 23. 8. 1853, S. 3756; NMZ, 24. 8. 1853, S. 1639; SL, 25. 8. 1853, S. 770.
- (13) Lisbeth Exner, *Elisabeth von Österreich*, 2. Aufl. (Reinbeck bei Hamburg, 2012), S. 9-14; Michaela/Karl Vocolka, *Sisi. Leben und Legende einer Kaiserin* (München, 2014), S. 10-16.
- (14) ハーマン『エリザベート』、上 36 - 39 頁。
- (15) NMZ, 21. 4. 1854, S. 962-963; AZ, 22. 4. 1854, S. 1779.
- (16) NMZ, 21. 4. 1854, S. 962.
- (17) WZ, 26. 4. 1854, S. 1137; LIZ, 6. 5. 1854, S. 291.
- (18) NMZ, 25. 4. 1854, S. 996-997; NPZ, 25. 4. 1854, S. 451.
- (19) Die Presse (Abendblatt), 22. 4. 1854; NPZ, 23. 4. 1854, S. 443; WZ, 29. 4. 1854, S. 1174; LIZ, 6. 5. 1854, S. 291.
- (20) Die Presse (Abendblatt), 22. 4. 1854; WZ, 25. 4. 1854, S. 1124-1125, 26. 4. 1854, S. 1137-1138; LIZ, 6. 5. 1854, S. 293-294.
- (21) ÖBB, 27. 4. 1854, S. 266-267.
- (22) AZ, 28. 4. 1854, S. 1875.
- (23) ÖBB, 30. 4. 1854, S. 273.
- (24) Die Presse, 22. 4. 1854.
- (25) ÖBB, 27. 4. 1854, S. 268.
- (26) AZ, 27. 4. 1854, S. 1864.
- (27) AZ, 29. 4. 1854, S. 1893.
- (28) AZ, 29. 4. 1854, S. 1893.
- (29) OIZ, 1. 5. 1854, S. 1323.
- (30) AZ, 29. 4. 1854, S. 1893.
- (31) LIZ, 6. 5. 1854, S. 294.
- (32) Die Presse, 23. 4. 1854.
- (33) Die Presse, 23. 4. 1854.
- (34) Die Presse, 23. 4. 1854.
- (35) OIZ, 1. 5. 1854, S. 1323.
- (36) OIZ, 1. 5. 1854, S. 1323.
- (37) LIZ, 6. 5. 1854, S. 294.
- (38) Corti, *Elisabeth*, S. 48.
- (39) ÖBB, 25. 4. 1854, S. 261-263, 27. 4. 1854, S. 265-267.
- (40) AZ, 27. 4. 1854, S. 1865.
- (41) AZ, 27. 4. 1854, S. 1864.
- (42) ÖBB, 28. 4. 1854, S. 272.
- (43) MP, 27. 4. 1854.
- (44) MP, 24. 4. 1854; LIZ, 6. 5. 1854, S. 294-295.
- (45) AZ, 27. 4. 1854, S. 1865.
- (46) ÖBB, 28. 4. 1854, S. 272.

- (47) POL, 25. 4. 1854, 26. 4. 1854; ÖBB, 27. 4. 1854, S. 268.
- (48) Die Presse, 25. 4. 1854.
- (49) ÖBB, 30. 4. 1854, S. 275.
- (50) AZ, 27. 4. 1854, S. 1869.
- (51) Die Presse, 25. 4. 1854.
- (52) Die Presse, 25. 4. 1854.
- (53) Die Presse, 25. 4. 1854.
- (54) LZ, 27. 4. 1854, S. 1992.
- (55) Die Presse, 25. 4. 1854; MP, 25. 4. 1854; WZ, 26. 4. 1854, S. 1135-1137; LIZ, 6. 5. 1854, S. 295-298.
- (56) MP, 27. 4. 1854.
- (57) MP, 26. 4. 1854; ÖBB, 28. 4. 1854, S. 270.
- (58) AZ, 29. 4. 1854, S. 1894.
- (59) MP, 28. 4. 1854.
- (60) MP, 29. 4. 1854.
- (61) AZ, 1. 5. 1854, S. 1933.
- (62) ÖBB, 2. 5. 1854, S. 279.
- (63) ÖBB, 30. 4. 1854, S. 276.
- (64) AZ, 29. 4. 1854, S. 1894.
- (65) AZ, 29. 4. 1854, S. 1893.
- (66) WZ, 25. 4. 1854, S. 1123.
- (67) WZ, 25. 4. 1854, S. 1123.
- (68) ハーマン『エリザベート』、上 87 - 88 頁。
- (69) Corti, *Elisabeth*, S. 50-51.
- (70) Vocelka, *Sisi*, S. 26-27. レセプションの取りやめにゾフィーは難色を示したが、妻を思いやる皇帝が行事を中止し、息抜きのため自然豊かなブラーターへの馬車遠足を代わりに企画した。花嫁に新鮮な空気を吸わせようとの試みであったが、お忍び遠足の情報が市民に漏れ見物人が殺到したため、すぐに遠足を切り上げる必要があった。Corti, *Elisabeth*, S. 52.
- (71) Corti, *Elisabeth*, S. 52.
- (72) シュテファン・ツヴァイク著、中野京子訳『マリー・アントワネット』上下、角川文庫、2007年。
- (73) ゾフィー、ルドヴィカ姉妹の上には、さらにオーストリア皇妃、プロイセン王妃、ザクセン王妃の姉たちがおろし、バイエルン王家の娘たちの縁談に「政略結婚」の思惑が潜むことは常であった。一方、フランツ・ヨーゼフ1世の花嫁候補も、当初はプロイセン王女やザクセン王女の名前が挙がっており、当然ながら皇帝の嫁選びにも「政略結婚」の要素が色濃い。ハーマン『エリザベート』、上 26 - 28 頁。

